

「植村隆氏、韓国のカトリック大学へ」

2016年01月21日

慰安婦問題否定派から攻撃されている、北星学園大学（北星）非常勤講師で元朝日新聞記者の植村隆氏の動向が気になりである。ホームページに3回ほど書いたが、北星はキリスト教主義大学で、私の友人が教師として働いていたから、一層、関心を寄せていた。

岩波書店の月刊誌『世界』の2月号に、往住嘉文氏と長谷川綾氏の二人の新聞記者が「正義のたいまつは引き継がれるか」と題して、経緯と現状を報告している。北星は2014年の春以来「植村を辞めさせないと爆破する」などと脅迫され、雇用の打ち切り方針を発表した。それに反対する市民グループ「負けるな北星！の会」を中心に、世論の高まりを受け、田村信一北星大学長は「暴力による言論弾圧は許されないとの社会的合意が形成されつつある」と雇用打ち切りを撤回した。しかし、雇用継続反対の声や、嫌がらせの脅迫が続き、教職員も疲弊し、15年度の警備費は3,200万円にも上がり、16年度の雇用継続は難しい状況になった。この時、韓国のカトリック大学の朴永植総長から「植村さんをお招きします。Justice（正義）です。東アジアの平和のためです」と申し出があり、この3月から客員教授として務めることに決した。慰安婦問題否定派は「ついに日本に居場所を失った」と勝利宣言をしている。

韓国から北星に交換留学生として来日し、植村氏の講義を受けた姜明錫君は北星の対応を下記のように批判している。「私は昨年、北星が見せてくれた勇気に、真理の力で外圧と戦う姿勢に魅了されて、とつても励まされて、何とか自分も北星と植村先生を応援したくなりました。カトリック大学の姉妹校である北星の植村先生を守るために署名運動をしたり、学術祭のスピーチを通して、植村先生や日本の厳しい現実を伝えたりしました。しかし、今北星が見せてくれる判断を見て、前回植村先生を守り切ったことも結局、外圧や言論、世間の視線が怖かったからではないかと思いました。北星の関係者の皆さんにお伺いしたいと思います。今の判断は後日、学生に向けても胸を張って自由を語れるような判断でしたか。見損ないました、北星。」厳しい言葉であるが、真実ではないか。

北星は戦時中、思想弾圧を受け教師が逮捕された歴史を持つ。戦後50年の1995年に「北星学園大学平和宣言」を出している。宣言には下記のように告白されている。「ことしは、アジア・太平洋戦争が終わって50年目にあたります。キリスト教の精神に立つ学園として、これまでの私たちのあり方をふり返り、あらためて平和をつくり出すことの大切さと、人権を尊ぶ教育の重要さを思います。戦争で、アジアの人々に与えた被害、苦しみを痛感し、その責めにこたえていくことが、ともに同時代を生きる者の責任と考えます。」

北星内外で多様な議論が交わされただろう。「不法な脅しに屈し、共に働いている仲間の職を奪うことは、法と正義、良心に反する。学生の期待、社会からの信託をも裏切ることになる」と主張する人もいた。「植村氏の存在は、外部からの攻撃のリスクになるだけでなく、内部の亀裂を深める。だから困る」と言う人もいた。容易に想像できる。

「爆弾を仕掛けてやる」と自宅の固定電話から脅した人は逮捕されている。逮捕に至ったのは、ひと月以上たった時で、皆あきれ果てている。「植村の娘を殺す」「自殺に追い込む」と脅し続ける確信犯たちは野放し状態にある。警察は犯人を捕まえるつもりがないのではないか。政府は都合の良い言論弾圧を内心喜び、利用しているとしか思えない。

北星を批判した姜君は「自分の国の過ちも記事にできる勇気と信念のある記者になりたい。尊敬する植村先生のように」と言っている。二人の新聞記者の報告は「国境を超えた、たいまつは引き継がれた」と結んでいる。